



平成25年7月22日
卓話 『銀行創設140年
～渋沢栄一の時代から現代へ』
株式会社みずほ銀行 取締役会長
塚本 隆史 様

今日は銀行の歴史のお話です。渋沢栄一が日本最初の銀行を創設したのが明治6年で、丁度140年前になります。明治政府が近代国家を作ろうと掲げた政策目標の1つが近代的な銀行を作ることでした。国立銀行条例を明治5年に公布し、普通の銀行業務に加えて紙幣を発行したり国のお金を扱う銀行として誕生したのが第一国立銀行で、初代頭取は条例の公布を担当した渋沢栄一です。明治29年に日銀が出来て第一銀行は株式会社となり、日本の工業の発展を支えてきました。第二次大戦後の復興に、高度経済成長時代には設備投資に、その資金を提供してきたわけです。

最近30年ぐらいの金融の歴史は大きく4つの時代に分類できると思います。1つは80年代までです。銀行はいわゆる商業銀行として貸出しや預金、為替などを中心にやっていて、証券は証券、保険は保険というように業態別に独立した形で成り立っていました。90年代に入ると総合金融サービス化ということで、シティバンクのように銀行も証券も、個人も中小企業も海外も、全て出来ますというサービスに進んだわけです。しかし商業銀行業務の差別化が難しくなる中で、いかに収益性を確保するかが課題になり、2000年代は投資銀行やヘッジファンドといったものが世界を席巻しました。投資銀行はお客様とのリレーションシップより、証券化を過度に行ったり自己資金のみならずレバレッジ(借入)を多用し投資をして収益を極大化することに傾斜してしまい、この投資銀行モデルがサブプライム問題やリーマンショックなど、いわゆる金融危機を引き起こしました。そして今、金融界は4番目のフェーズに入りつつあります。いろいろな危機に対する反省から規制の問題が出る中で新しい座標軸がまだ決まりず、今後どう新たなビジネスモデルを作

り上げるのかが課題となっている、そういう時代だと思います。

この80年代、90年代から起きてきたことの裏には、金融資本主義の肥大化があったと思います。先進各国の経済が中々活路を見いだせず投資機会が少なくなる中で、金融へいけばひょっとして何かできるかもしれないということで、結果として実体経済の成長をはるかに上回る形で金融が大きくなってしまった。90年代はベルリンの壁もソ連も崩壊し、それまでの冷戦構造、二極構造が崩壊しました。資本主義が1人勝者になった中で、金融資本主義が市場原理主義と結びつきあたかもわが世の春を謳歌するような時代が、欧米を中心に続いたわけです。

今回の金融危機では日本の金融機関は相当控えめにやっていて、大損したところはそれほどありません。なぜ日本が慎重だったのか。それで思い当たったのが渋沢翁の「論語と算盤」という本です。彼はその本の中で、経済は倫理あるいは道徳を持つことで初めて生きていけるとおっしゃっています。「経済道徳合一説」です。人間の欲望自体を否定することはできませんが、これをコントロールし暴走させないことが大切です。そのためには、ルールや規制のみならず、倫理や道徳が不可欠であると思います。渋沢翁によって礎を築かれた日本の資本主義が、長い流れの中で持っていたこの精神性・エースをしっかりと維持していくけば、必ず日本の復活が訪れると思います。ご静聴ありがとうございました。

